

重詩人論

詩への接近「現代詩手帖」1980, 10

古井戸の底の詩人『チュビズム宣言』1982, 12

言葉の生身「伊藤比呂美詩集『青梅』手帖」1982, 7

「暮しの方箱」を転がしたら、詩の目が出た「詩学」1981, 6

Ⅳ詩の原理

主体の私的撞着「現代詩手帖」1980, 6

底ということ「現代詩手帖」臨増1981, 12

ことばの首に突き当る「公評」1982, 9

いま、詩を書くということ

昭和五十九年十月二十日第一刷発行

著者 鈴木志郎康

装幀 芦澤泰偉

発行者 小田久郎

発行者 株式会社思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三一十五

電話東京二六七―八一四一(代)

印刷 凸版印刷株式会社

定価 一八〇〇円 1392-200062-3016

◎いま、詩を書くということ◎

● 目次 ●

I 詩の状況

作者は言葉の裏で沈黙している——△作者▽とは何か——10

只今、タケちゃんマン状況です——詩はこれでいいのか——27

昼間前線の移動で詩が面白くなるでしょう——詩とメディア——32

若い女性詩人のみなさん、

上越新幹線に乗ってはいけません——いま、△女性▽性とは何か——40

詩は憂鬱に騒いでいる——詩の状況1——54

新しいところで、「ワタシ」は媒体化している——詩の状況2——77

現代詩を、超モダニズムに付会してみる——詩の状況3——95

紙離れ、ことば立ち——いま、詩をどう書くか——114

いま、詩を書くということは——123

II 詩を歩く

罪障感ともなう興奮——松浦寿輝詩集『ウサギのダンス』——132

視線が冷えて来ている——荒川洋治詩集『針原』——135

感性の最前線を行く——北村太郎詩集『犬の時代』——138

郷土に身体をぶつける——阿部岩夫詩集『月の山』——141

処方としての肉体の物体感——小長谷清実詩集『スクラップ、集まれ』——143

高揚果敢な荒唐無稽——ねじめ正一詩集『脳膜メンマ』——148

言語的狀況に突撃する——北川透詩集『魔女的機械』——150

阿Q川俣軍司を辿る——石毛拓郎詩集『阿Qのかげら』——153

無に帰すものへの名残り——三好豊一郎詩集『夏の淵』——157

ことばに嵌めて、漂う愁い——諏訪優詩集『田端事情』——160

ことばの祭儀的時空を拓く——吉岡実詩集『薬玉』——163

詩の転生への地固め——清水哲男詩集『地図を往く雲』——167

暴虐という事実の重み——金時鐘詩集『光州詩片』——170

Ⅲ 詩人論

詩への接近——吉岡実序論——176

古井戸の底の詩人——吉岡実、岩成達也——182

言葉の生身——伊藤比呂美の現在——198

「暮しの方箱」を転がしたら、詩の目が出た——ねじめ正一小論——207

Ⅳ 詩の原理

主体の私的撞着——「現代詩入門」の入門——216

底ということ——223

ことばの音に突き当る——235

I 詩の 状況

作者は言葉の裏で沈黙している——〈作者〉とは何か

「傾向報知」という詩誌が送られて来た。その四号に載っていた榊原淳子という人の「いつもいつもあなたにメイワクばかりかける私がバカです」という長い題名の詩を読んだとき、わたしはよそ見をしているところに飛んで来た球を受けそこなったような気持ちになった。それをわたしは「驚いた」と思った。こんなのは詩ではないと、あっさり片付けることもできるような思えるのだが、そうして意識し始めると、見過せなくなってしまう。読み返すと、そこに書かれている言葉から、妙に生々しくひとりの女の子がいると感じられ出したからだだった。

それから、「現代詩手帖」に詩の作者というものについて文章を書くに当って、飯島耕一さんの「現代詩手帖」に昨年（一九八一年）連載されていた「夜を夢想する小太陽の独言」という詩を掲載順に読み返しているうちに、その詩が榊原淳子さんの詩と「同じだ」と思えるところがあるように感じられて来たのだ。それははじめ、ひとつの思いつきのようにも思えたが、飯島耕一さんの詩を「他人の空」から順々に読み返して行くうちに、やっぱり、「小太陽の独言」と「私はバカです」の言葉が、同じ質のものである。どうしても思えて来てしまったのだ。お二人の詩の部分を書き写してみても、くらべてみよう。榊原淳子さんの詩は六十六行あり、飯島耕一さんの詩は一回分が八十行近くあって、九回の連作なので全部書き写すことはできない。先ず榊原さんの詩の前半部分と最後の数行を読んでみる。

Oral Sex 基本型

応用型

さらには実践講座

あん・もっと感じるようにヒモといてよ

ドキドキワクワクするくらい

そうあの子といると高校の頃に戻る

時がめくれあがって

車の中でやるならうしろつきではダメだなんてハン知ったかぶり

ハッ

後輩に会ってね 今大学二年でね

“せんぱいすっごくセーラー服似合ってたよ”

その途たん周囲の視線が

アッ これならオカマの健ちゃんにも大丈夫

煙草消すんならちゃんと灰皿にね

ホラ 枕元にあるでしょ

ティッシュ・ペーパー

写真なんてコラ ダメだって言ってる
何にもすることないの アンタ
ヤネ スケベッ

うん もしそんなことしたらTちゃんと結婚できなくなると思ったら
つい ムラムラと
それで何もかもおしまいになった

もう買っちゃったよハーバーでよかったんでしょ
えっ 今さら

今日泊めてくれるって言ったじゃない
何よあの女
ぬりたくってオバケみたいね

セーラー服のことだけどね
似合わないって気にしてばかりいた

だからボーイ・フレンドできないんだと思ってた
なのね

ヤダナ あたしじゃないってば

あんな子好きじゃないよ

もうやめてよ

あなたは奥さんとこ帰ったらいいじゃない

(二十四行略)

一応アンタに惚れてるんだから

言葉には気をつけないさい

キミニハナニヲイッテモムダダナ

キミニハナニヲイッテモムダダナ

キミニハナニヲイッテモムダダナ

バイバイ

ありがとう

これだけ書き写していて、腰が浮いてくるような気持ちにわたしはなっていました。これは話し言葉をただ無闇矢鱈に書きつけられているわけではない。効果を考えて、選んで書かれている。わたしが腰が浮いてくるような気持ちになったのは、これらの言葉が狙っている位置に据えられそうになるからだと思える。言葉はどうやら、結婚の約束を別の男としている若い女と、妻のいる男との情交場面をイメージさせるように仕組まれ、その二人の男女が話している言葉の内容を求めるとはぐらかされてしまう。セーラー服という言葉だけが、女の内面の存在を暗示しているが、その内面を表現しているというわけでもない。すべてわけのわからない痴語にすぎないと片付けてしまえばそれですむのかも知れないが、痴語であるとしても、痛々しく傷ついた若い女の心が感じられてしまうということもあるのだ。「甘ったれんじゃないよ」といってしまえば、それで終わりだが、わたしはこれらの言葉に表われている若い女の空虚に足を引き止められてしまうのである。その若い女が「私はバカです」といっている女で、作者の榊原淳子さんその人なのであるかどうかということは即断できないように思う。

さて、次は飯島耕一さんの詩である。これは連作の最初の詩の、「小太陽の独言」といっているのだから、とにかく「太陽」が出てくるところまでを書き写してみる。

海の切れはし

追う

逃げる

(みにくい四角獣にしめつけ
られた浜)

浜も 終った

吊革にぶら下って

まだ探している

コーヒー店

窓の外

うごめく頭たちのうえ

ファントム(崩壊する音楽)

詩が生活を食うようになる

通りに ちらばって

足にからまる

みなれない 海藻たち

拒否する拒否する砂が動いて

映画は進展する 愚者たちの膨大なフィルムが

作者は言葉の裏で沈黙している